

平成30年度防災教育モデル実践事業報告書

学校名 豊後大野市立緒方中学校

I 学校の情報

1 学校規模

緒方中学校：学級数4 児童数92人 職員数18人

2 分掌の位置づけ

防災教育コーディネーターを配置

3 地域環境

緒方町は緒方川や大野川をはじめ、町内至る所にある井路があり、水が豊かな分、大雨等では河川の氾濫や土砂災害が起こるなど、防災に係る体制整備が求められる地域でもある。

II 本事業の研究テーマ

「主体的に判断し、自ら進んで行動できる児童・生徒の育成」

～防災の視点を取り入れた教育活動を通して～

III 本事業の取組のポイント

豊後大野市は、連携型小・中一貫教育とコミュニティ・スクールを活用した学校間連携や地域・保護者との連携による教育の推進を特色として取り組みを進めている。今年度指定を受けている緒方小学校・中学校では、地域の学習サポーターや歴史民俗資料館の支援を得て、小中9年間を見通したカリキュラムを作成し、ジオサイト学習やふるさと学習に取り組んでいる。

緒方小・中学校における防災教育9年間のカリキュラムを作成し、防災マニュアルの改善を行う。また、緒方町学校運営協議会（コミュニティ・スクール）を活用して有事の課題や対応について検討し、避難訓練等での実践に活かす。

緒方小・中学校の取組や研究成果をもとに、市内各学校の防災計画や防災マニュアル、カリキュラム等の見直しを行い、各町学校運営協議会の研究課題として防災教育の必要性について確認する。

委託事業終了後は、緒方小・中学校をはじめとした緒方地域の取組をさらに定着、深化させるために他町での研究も検討したい。

IV 本事業の経過と具体的な取組

1 学年の具体的な取組

2018年5月24日（木） 5.6時間目 歴史民俗資料館訪問

めあて：自分たちのすんでいる地域で過去にどのような災害が起きたのかを、詳しく知ることによって災害に対する意識をこれまで以上に強く持てるようにする。

内容：豊後大野市歴史民俗資料館の大野さん、高野さん、吉岡さんに話を聞く。

○緒方町の災害が起きやすい地理的な条件、H2年、H5年の大水害、鉄橋が流されたこと、自衛隊が駆けつけたこと、H16年、H17年、



H24年、H29年の台風での土砂崩れの様子を写真や動画を使って、話していただいた。

2018年5月30日(水) 3, 4時間目 歴史民俗資料館訪問まとめ

グループに分かれて、台風や洪水別に、自分たちが習ったことを模造紙にまとめた。



6月13日 3, 4限「災害当時の状況を知る方の話を聞く会」実施

めあて：自分が暮らす地域で過去に起こった災害を知った上で、実際に被災された方、救助にあられた方の話を聞くことによって、防災に対する意識を強く持てるようにする。

内容：豊後大野市消防署の消防士、舛田淳一さん、H24年の大野川の氾濫で自宅が被害に遭われた金子恵んにおいでいただき、当時の様子を語っていただきました。



10月4日 防災食体験

めあて：ボランティアとして被災地に出向き、防災食を作った方のお話を聞き、実際に防災食を自分たちで作ることで、被災地の様子を知り、これから起こりうる災害、避難所の様子等を追体験できるようにする。

内容：停電、水がない(保存してある)という設定のもと、家に必ずあるお米、乾物、出汁を材料に、カセットコンロを使ってお米を炊きました。お鍋に水を入れて湧かし、材料をジップロックに入れて、湯煎をして温かいご飯ができあがり。固かったり、しょっぱかったりしましたが、非常時に温かいものが食べられることはとてもうれしいことだ、と話していただきました。

10月4日 引き渡し訓練

めあて：暗くなってからの保護者への引き渡し訓練を行うことで、緊急時に保護者が来るまでの手順を理解し、冷静に行動することができるようにする。

内容：生徒を玄関に近い部屋で待機させ、担任が玄関にきた保護者を出迎え、引きしカードと照らし合わせます。確認できたら、トランシーバーで生徒の部屋の副担任に名前を告げ、保護者と生徒を引き渡します。の体験で課題も成果もよくわかりました。次回の全校引き渡し訓練へとつなげていきます。

被災地研修

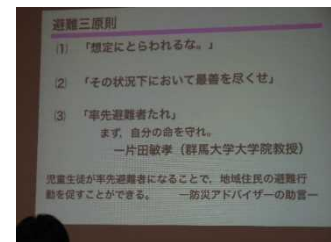
*講話1「被害にあった時の様子」 講師：日田市立小野小学校 冷川 善幸校長

2017年7月5日、昼過ぎから断続的に激しい雨が降り、特に夕方からは猛烈な雨が降り続き19時55分に大分県で初めて大雨特別警報が発表された日田市。小野地区はその時、山林の大規模崩落により河川が閉塞し、上流部で土砂ダムができた。主要幹線道路が埋没し、一時上流部が孤立する状況とな

り自衛隊による救援活動が行われた。これまでに経験したことのない大雨に冷川校長先生は大変な恐怖を感じられたそうだ。その経験から次のような内容のお話をしてくださった。



- ・状況は急速に悪化する。現状をしっかりと把握することの大切さ。
- ・どのように行動するのが大切。
 - ①『マイタイムライン』を作成することの大切さ。
 - ②地区防災マップの活用。
 - ③防災街歩きをするということ。
- ・避難三原則を基本に考える。
- ・災害があるときは必ず何か兆候があるものだ。様々な環境の変化に注意することを心掛ける。



*現地学習

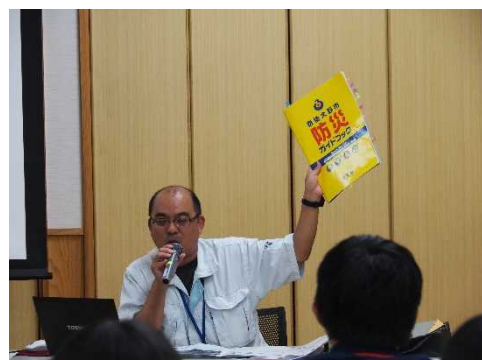
小野公民館から徒歩で移動し、生々しく残っている山林の大規模崩落の場所を見学した。もう一年以上たっているのに、被害にあった時のままのようにも見える現場に私たちは言葉がなかった。学校で学習したときに写真や映像を見ていたけれども、現場の大きさ、今も行われている作業の様子など、その場所に行かないと分からない現地学習の重要性を改めて感じた。



*講話2「避難の状況について」

講師：日田市防災・危機管理課職員 青木 克也 さん

午後は日田市防災危機管理課の職員青木さんにお話しを伺った。7月5日の降水状況や日田市の対応、各地区の被災状況などを多くの写真とともにお話をしてくださった。災害が起きた時にどのような判断をしたらよいか、避難所の中でどのようなことに注意したらよいか、など私たちの疑問にも丁寧に答えてくださった。普段から家族と話



し合う重要性を再認識した。

＊生徒の感想（抜粋）

○災害があった時に、防災リーダーである私たちが地域の人の手伝いをしないとイケません。災害が起こったときにどうすればいいのかなど今日の講話を聞いて考えることができました。いざとなった時には、自分たちで地域を守る必要があるので、今日、学習したことは忘れません。

○近所の人とのコミュニケーションの大切さがわかりました。近所の人と知り合いになっておくことで、助けあうことができるとわかりました。これから、近所の人にあいさつをしたり、地域の行事に参加しようと思います。



V 成果と課題

本年度、本校では「防災教育」を総合的な学習の時間の教育課程に位置付けて取り組みを始めた。1年間の学習が終わった時に、生徒の気持ちや行動がどのように変容してほしいかということ、各学年の生徒の実態に合わせて考え、その目標達成に向けて、それぞれの学年で計画をたてて、学習を進めているところである。

中学校では、「心身ともにたくましく、どんな状況にあっても最善をつくすことができる知識と行動力のある生徒の育成」をこの防災教育の目標にしている。「どんな状況にあっても」とはつまり「非常時、災害時」である。それぞれの生徒の最善を尽くす力が、学習を通して最大限に高まり、学習したことを活かして行動できるようにさせたいと授業を仕組んできた。

防災教育でできることは、災害・防災に対する知識をしっかり身につけさせること、その知識をもとに災害・防災を自分の生活と関連づけて考え、災害に対する備えなど具体的な行動をおこす気持ちを喚起させること、そして他の地域で実際に起こっている災害や被災された人々がおかれている状況に心を寄せることができる心情を育てることである。

このような視点でこれまで実施してきた学習の、成果と課題を以下のようにまとめる。

- ・自分の住んでいる地域で過去におきた災害（大雨、洪水、豪雨、土砂崩れ）についての知識が深まっている。
- ・災害のニュースなどへの関心は高まっているが、一人ひとりの関心度には差がある。
- ・豊後大野市では「豊後大野市防災ガイドブック」という名前でハザードマップを各家庭に一冊配布しているが、学校で扱ったため、周知された。
- ・実際に災害が起こった時に、自分がどこに避難をすればよいか、ほとんどの生徒が知ることができた。
- ・生徒が学校で学習したこと、学校がPTA研修などで家庭へ発信したことをもとに、家族で災害について話し合いを持てたところが31%から74%に達した。また、家庭で災害に備えて備蓄できている

ところも5月に比べて増えている。

- 生徒の意識も、「災害に備えたい」「怖い、不安である」などの漠然としたものから、備蓄品や非常食に関して、具体的に何をどのくらい準備するのか、どこに置けばよいのか、などを意識した、より具体的なものになっている。
- 避難場所で自分にできることを考えさせた時も、自分の命のこと、家族のことを考え、内容的にも、高齢者の手助け、食料の配布、そうじ、荷物運び、地域の方とのコミュニケーション、情報の収集などといった具体的な事柄がたくさんあがってきており、学習の成果が出ていると感じる。